北越雪譜 初編

下之巻

ル 4
6316
3

北越雪譜初編巻之下

目録

渋海川さかべつこう 順上下ホ
鮭の食用
鮭を捕る打切並
漁夫の溺死
鮭漁の類術
人家の垂氷
滝の氷柱
寒行の威徳
剛山村の毛塚
泡り山の大猫
鮭の字考
鮭を出す所並鮭始終
撥網
千曲川の総滝
鮭の洲走り
笈掛岩の氷柱
雪中の寒行
雪中の幽霊
雪中鹿を追ふ
山言語

荻野蔵

童の雪遊び

通計二十三條

雪ふ座頭を降る

越後奇跡録 五巻

近刻

鈴木牧之編撰
京山人百樹刪定

此書ハ越後七不思議の細説并ふ圖名所旧跡の支跡并圖國中温泉の圖并ニ主治山川勝景の圖説近古人物名誉伝傳授の餘種〻の奇談其地を踏て其事ハ見るごとくふ記〻る假字文の書ものを干此帋帙葉の餘地在り空〻うしてくるを以て古の書名を標して大方の諸君ふ報じ刻ニ先んぜるの好評を祈る

京水百鶴画圖

書肆 文渓堂謹識

北越雪譜 初編 巻之下

越後塩澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○浩海川さかべつとう

我国の俚言ふ蝶をべつとうとのふ浩海川のやとりゆへハきらべつとうとのふ蝶譜の虫の羽化する所ニ大なるを蝶とのふ本艸其種類ハ多ク草花も蝶ふ化する事本草ゆもゆえ〻り蝶の和訓をかえひらとのふハ新撰字鏡ゆもゆえ〻豆ごさかべつとうとのふ名義ハ未考ぶさて前ふのべる浩海川ゆて春の彼岸の頃幾百方の白蝶水面より二三尺をかるるとく羽もたをあふたり群さるが高さハ一丈ばかり両岸を限りとして川下より川上の方へ飛行その形状花のごときとんんハ白ろと幾里ともなく流れふ霞をひきるごとく朝より夕べまで悉く川上へつぎとるがその〻ぎりをもるも川水もええぎるやどこさて日も暮るんとするふ

いとまぐるみ水面ゐかちらして流れてぞ　そのさま白布をながしたるごとし　其蝶の形燈蛍ゐどゆて白蝶と我国ゐ大小の川ゐ幾流もあるゐゐ此浩海川ゐのみぐりて毎年ゐゐ此事あるも奇とまべし　まゐゐ天明の洪水以来此事絶てゐ

○本草を按ゐ石蛍一名を沙虱といふゐの山川の石上ゐ附く蘭をゐ春夏初化して小蛍となり水上ゐ飛ぶこと一件のさうべつさうハ浩海川の石蛍なるべし　其種を洪水ゐ流し尽くしゐるゐ他国ゐも石蛍を生ずる川あらば此蝶あるんもあるべしゐ余此蝶をゐぎりしゐ近隣の老婦若きころ浩海川の辺りより嫁せし人あり　ゐ来ゐ問ひしゐ人今より九百四十年あまりの昔　寛平昌泰の年間作りゐる文字の吟味を考る書こむひとり世の学匠ゐ傳へ写して重宝せるまきゐるを近き頃村田春海大人右の書を

京都ゐ購得てのち享和三年の春創く板本ゐ世の重宝とゐりて
より后の学者の机上ゐ置ハ實ゐ春海大人の賜ゐりけり右の字鏡ありて
后二十余年を歴て源の順朝臣の作りゐる和名類聚抄ありき是も字書之
元和の年間那波道円先生創て板本とせるとゐり後の板　和名抄ありく
后五百年ちかくをへて文安年中下学集といふ字書ありきこれも元和三年
創て板本とゐりゐり下学集より五十三年の后明應五年林宗二堺の町人節用
集を作り文亀のころの活字本ありとまいろは引節用集の権輿之其后
百八十年を歴て元禄十一年ゐ摸鳥昭武駒谷山人が作りゐる江戸の人書言字考
一名合類節用集といふ板本ありゐ宗二が節用集を大成しゐる物ゐそいろは引
平他字類抄のゐる下ゐ引用せるものハあらゐあげぬ　本朝の字書のゐる大低ハ件のごとしまべ今俗用ゐる
節用集ハ新撰字鏡和名抄を先祖の父母として后のハ皆其子孫之是ハ鮭の字
の事を言んとて童蒙の為ゐ先りゐ之けり　○新撰字鏡奥の部ゐ鮭佐

とゝり和名抄ゆハ本字ハ鮭俗ゆ鮭の字を用ふゆハ非とゝのりさるべハ鮭の字を用ひ〳〵も古〳〵同書ゆ雀禽錫が食経を引く「鮭其子苺ゆ似て赤く光り春生まゝて年の内ゆ死ゝ故ゆまゝ年魚と名く」とゝえゝり新撰字鏡ゆ鮭の字を出〳〵ハ鮭と鮭と字の相似るを以て傳写の誤りを傳へ〳〵もあるべゝ

ゞ鮭ハ河豚の事ゆるをゝ下学集ゆも鮭干鮭と並べ出せり宗二が文亀本の節用集ゆも塩引干鮭とゆゝべゞをりてゝも鮭と鮭と傳写のあやまりゆゝ

駒谷山人が書言字考ゆハ○鰯○石桂魚○水豚○鮭と出して注ゆ和名抄を引く本字ハ鮭とゝのり大典和尚の学語編ゆハ鰯の字を出さゝてゝ鰯をあさぢト訓ゝ唐の字書ゆハ鰯ハ大口細鱗とあるべハ鮭ゆるゆるせるゆゝん字彙ゆハ鮭ハ鯉の本字ゆゝ魚臭とゝのゝ字とゝのり按るゆ鮭の鮮鱗ハことさらゆ魚臭きものゆゑゆやあゝん鮭ハ鯢鮎の一名ともゝべハ鮭ゆハいよ〳〵遠〳〵しとまゝとかゝまゝ鮭の字を知りて俗用ゆ鮭の字を用ふゞ〳〵件の如く

鮭の字も古く用ひゝまゝべハおのゝゝの和文章ゆも鮭の字を用ふゞ〳〵鮭の字ハ普くハ通ゞ雛〳〵とゝゆハ姑く鮭ゆ仏ふ

○鮭の食用

腥ゆて喰ゝるハ○奥軒○鱠○鮓○熹○炙その料理ゆよりて猶あるゞ〳〵醃ゆゝるを塩引まゝ干鮭とゝひ〳〵も古き事まゝゆ引くる書ゆえゝるゞとゝ〳〵延喜式ゆのせるる内子鮭ハ今いふ子籠り鮭の事ゆるゞ〳〵

又同書ゆ脊腸をゝるゝとゝト訓り丹後信濃越中越後より貢とゝる度もゝえゝゝまゝべ古代ハ鮭を供御ゆも奉りゝるゝゞ〳〵都〳〵遠きよりゝゝゞゝまゝべ塩引ゝるゝん頭骨の澄徹ゝゝろを氷頭とゝく鱠ゆ隹ゝ子を鰤とゝいふゝゝを醃ゆゝゝるも美味ゝ子あるゝゝを塩引ゆゝゝるを子籠りとゝのゝ古へのゝゝべよりトいひ〳〵も是ゝるゝん〻本草ゆ鮭味ゝひ甘く微温毒ゆ〳〵主治中を温め氣を壮ゆゝ多く喰へバ痰を發ゝとゝのゝ我国ゆて塩引ゆゝゝるを大晦日の

節ハ用ひざる家々〜又病人ハも喰を他国ハて腫物ハいもハことゝハるなり

○鮭を出を所

鮭ハ今五畿内西国ハ出を所を聞ざ東北の大河の海ハ通ぎるハ鮭あり松前蝦夷地最多〜塩引として諸国へ通商ハ此地ハ限る次ハ我が越後ハ多〜又信濃越中出羽陸奥と常陸ハもありとさつことらの国の鮭ハその所の食ハあつるハ足るのみ通商をるハさらず江戸ハ利根川ハありといとも稀なる也初鮭ハ初鰹の價ハ比をとゞ我国ハ毎年七月二十七日所〜ハある諏訪の祭りの次の日より鮭の漁をたゞち十二月寒のあけるを漁の終りとも古志の長岡奥沼の川口ハあり〜漁〜る一番の初鮭を漁師長岡へそまつまゝ例として鮭一頭ハ一頭を一尺宋七俵の價を賜ふ第五ん定めあり俵の名ハ下る　鮭の大なるハ三尺四五寸小なるも二尺四五寸と猶小なるもあり

男魚女魚の名ありめるハ子ある也をなるより価貴〜五番まで奉りて后を賣る初鮭の貴きゆゑ〜ことを賞をるゆ江戸の初鰹奥ハをきゝ〜ゆゑ初鮭ハ光り銀のごとくハして微青をあり肉の色紅をぬりるが如〜仲冬の頃ハいまゝ身ハ班の錆いで肉も紅ハ薄〜味も少劣より此国ハ〜川口長岡のあるを流る〜川ハて捕りるを上品とも味ひ他ハ比をゝバ十倍〜僅ハ其地を去ゝバ味ひ美なるもの〜その味ひ美なるものハ北海より長江を泝りて困苦をるの度ハあるゆゑなるん奥急浪ハ困苦バ味ひなるゝ甘美りの〜北海の奥の味ひ厚と南海の奥の味ひ淡の差ひあるゞごとし

○鮭の始終

我国の鮭ハ初秋より北海を出て千曲川と阿加川の両大河ハ泝ることを其子を産んとて女奥ハ男奥随てのぼる泝る事かよそ五十余里河ハ在

渋海川奇蝶之圖

産まること五ヶ月あまりにして其間に八九十人に捕らるゝまさるべし海に飯る故に大小あり子を産つける所にかなら心にあり一定なるもとゝ千曲と奥野の両河の合る川口とゝふより沙に小石のまじるゆゑこゝろをおのゝが産所と流まの絶急にして清き流水の所に産こうまんとて鮭の捨く群るを漁師のこゝろに掘ふつくさまふつくともいふ沙をかるゝふさぐのうちをかるを女奥男奥ともに尾をもて水中の沙を掘るその廣さ一尺あまり深さ七八寸長さ一丈あまり数日ふしてこゝを作るつりをうまゝ女奥そのゆく鰤を一粒づ産むうむをうくく男魚己が白鮒を弾着直に女奥男奥掘のけるる沙石を左右より尾鰭ゆくもこゝひらけて鰤を埋む一粒も流さず事をせぎさて此一掘に産をうまゝ又そこに並ゝ掘りて産うゝにはかり幾條もおゝくべりて終に八九尺四方の沙中に行戈ゝく腹の子をのこゝぞ産をうる或は所を替ても産とぞ沙に小礫の交りなる所にあゝざまゝ産ぞと漁師がいりその所為人の智にをきゝ

産終るまでの困苦のこゝに尾鰭を撓ひ身痩労るまでにくぐり深淵ある所にいまゝ沈を居て勞を養ひもとのごとく肥太りて再び流に泳る掘につきる時に漁師もこゝをとゝびこゝ捕るりのわまゝも強てせぬまゝ女奥さゝとゝざまゝ男奥に其所をきゝぞ鮭の河に泳ぐ子を産んとてこゝの女奥に男奥隨てのぢゝ子の為に女奥を助るうんこゝも又人の心にこゝるゝさて奇なるに河の廣き場にそうま鰤を産きる所然水ぞにて瀬うりて河原とうりしが幾とせにても産る子膚ぞふてび瀬とうまゝその子生化して鮭とる一年我が住む所の在ゆく奥野川のそとりに住む人井を掘りに鰤の腥るをりいぞゝありゝと友人がかゝり紀鰤の生化るを漁師のこゝにふ早化。身ヨ化鰤水にある事十四五日にして奥とる形ち糸の如くにけ一二寸腹裂て腸をうさぞゆゑに佐久の君ありとゝに傳ふ春にいまゝ長ゝて三寸あまりにうるこゝをばうゝも捕らぬ事

とも此子鮭雪消の水に隨ひて海に入る海に入りてのち裂て腹合して腸をみもと漁父がいとり前にもいふ如く鮭の漁ハ寒中を限りとも寒あけて捕ものを崇をうもとといひつたふ我が若りし時氷村の一農夫寒あけて后頻のとりて鮭を奪ひてを喰ひ〳〵歎れうをを三日に〳〵死する事ありきたびたりあるといふ口碑の説も誣べからもを又をを産ものをとをたびその家斷絶せといひたふ鮭の大なるハ三尺四五寸に及ぶものあるもあり之ハ年〳〵網を脱ものを長じ〳〵なるべん我が若年のころハ鮭あまりとをとなる由なその價もいやしかりしが近年ハ捕うる事少きゆえ價もおのづからもりしに倍せり年〳〵工を新にして漁する由なる捕減〳〵するゆえん女奥の大なる由鰤一升もあり小なるハ三四合に及ぶもの江戸に多くもてあつふ塩引と唱ふハ鰺鮭を越後の鮭とハ一品別種なる物なりと或物産家のいふり河に生ずる海に成長せるものとより海ゆく網に入る事なり〳〵其始終をおりのに鮭ハ鱗族の奇異といふべし

牧之常に云ふ〳〵寒気の頃捕うる鰤と男奥の白鯀とをまゝ〳〵鮭居る川の沙石に包を瓶ゆうのものふうつ〳〵入る鮭なきに国の海に通ずる山川の清流にかの瓶ふうつ〳〵うるをを沙石のまゝさけのうををつけうる如くふう〳〵おの此川にく鮭いでくとも三年捕る事を国禁あるべ〳〵鮭を生ぜんもあるべ〳〵生ぜバ国益ともなるべん〳〵江戸の白奥ハ〳〵そのをとをうつ〳〵ひ〳〵とぞきつる

○打切り並ふつゞ

北海新潟の海門にふつる大河を阿加川と千曲川とあり川の名ハこれを千曲川一名を信濃川ともいふ限の字をも用ふ千曲川の水源ハ信濃越後飛騨の大小の川〳〵あまた流を併て此大河をなをを越後ハ妻有上田の二庄をなをを奥野川の急流をなを〳〵奥沼郡数上の庄川口驛の端にいたりて信濃を流る川と合して古志郡蒲原郡の

中典を多くとる海に入る信濃の流は濁り越後は清し信水は犀川の濁水
なるゆゑに鮭初秋より海を出て此流に泝る蒲原郡の流は底深く河廣ゆゑ
大網を用ひず鮭を捕るかの川口驛より上田妻有のあたりまでは打切といふ
事をなすなり鮭を捕るその仕方は夏の末より事をはじめて岸根より川中へ
丸木の杭を建つらね横木をそえ竹簀をもてこれを遮間なり竹簀をもてこれを
なすは川の石をよせかけて力となすを長さは百間二百間ありて周圍形は川の便利
ふるこぶの船の通路はこれを除きなすは障りをなすなり又通船の路即を建て夜の
為となさしこれをつくるといふ物を簀下へなすべき鮭の入るべきやうにくくりもくくりの
なすをもくくりかくし此つぎの作りやうは竹を簀ふるとして末をばくくり鮭の入るべきロの方は
竹の尖を作りうけて腮をなすは地にふれなくば方はひろく上は丸くして胴は彭張あり
長さは五尺ばかりの鮭入らんとなすはロ廣くなすはいろいろ功を作りうるものこ
れをつぎとなすは筒といふべきを濁り訛るなり田舎言語は古言のまゝを

いひつたへもちゐるを方のぶるもあれど言の清濁をとりちがへ物の名をどのかく
なるも多し阿加川を所者とは此打切を作るは幾ばくの費ある事ゆゑ漁師
ども語らひあひてなるなり打切なる岸は假に小屋をつくり漁師ども
昼夜ともにありて夜も寐ずして鮭のかゝるを待ち七月より此業をなすべし
十二月寒明まで一連のりのかゝるく此小屋にありて鮭をとる此打切は川口を
一番とし水上へ十五番までありてこれは川の境目ありて
なるゆゑに嚴重なり○さて鮭は川下より流に泝り打切にいたり船のとゝまるべき
所は流を打切にせるなり小滝をなすゆゑ滝にのぼるをいとふなり大なる打切の
よりどころにいたりかの垣にせまり潜るべき所やあるとてかゝるこぶ籠つぎをなす
なる所にいたりいでんとしてこれにふれば底あるゆゑいでんとするに口に尖
りの腮ありて出るなるべし○さて小屋にあるものはかりつくんとするなど
をとりまとめるなり

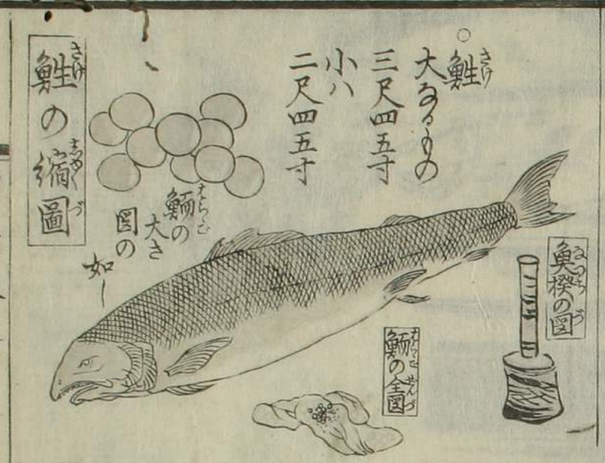
大木を二つにわりてこれを
りぬきて舟にのりいでゝ○瀬の浅き所
舟を用ひず

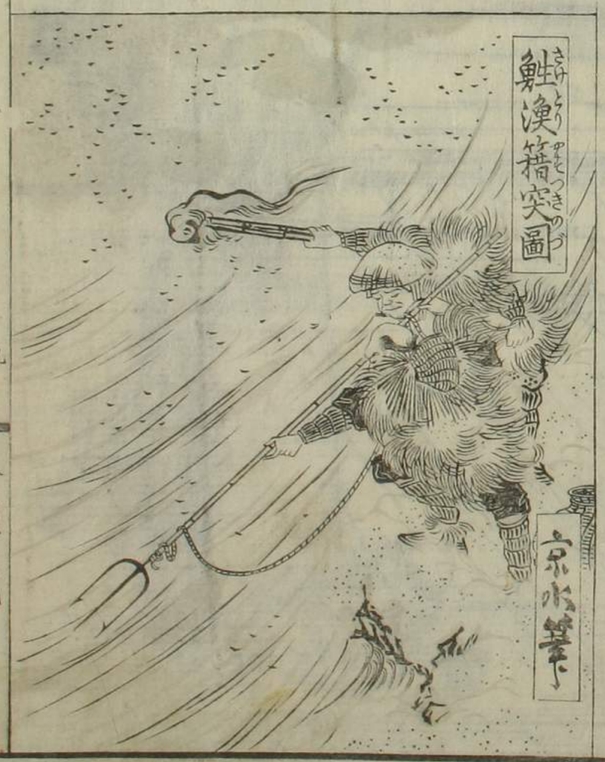
雪下る寒夜ゆも銭の為ゆそのさもきをもいとゆも赤裸ゆありて水ゆ飛入り
つぶをさぐ〜鮭あるべつぐのまく舟ゆ入きさけをいぐも大鮭ハ三尺あまりと
あるもの〜鰒狂ふゆ奥揆といふすのゆ〜頭を一打うてば立地死さてゆ奇ね
るゆハ此奥揆といふすの馬の爪をきりくる揆ゆあ〜ぐまべ死せぞ私ゆつ〜り
るつちゆそハいろ打ても外ぞ又るまぐ頭ゆ打ぐき取もあり〜と漁夫がいへり
鮭ある所ゆハいづくゆも此ゆちを用ふる馬の爪きるつちことぞ助賈
きりくさけをとそうる〜

○搔網

かきあとゆハ擡網あり鮭を擡ひ捕るをいふその擡ひ網の作りぞうハ又ある木
の枝を曲げあ〜せく飯櫃ありゆ作りこゆ網の俵をつけ長き柄ありても
ふ〜りとも岸の阻る所ハ鮭岸ゆ〜のぐるのゆ岸ゆ身を置ぞ
りの架をくきくちゆ巻く腰ゆ奥揆をき〜鮭を搔探りてもひとるあり

岸の絶壁ある所ハ木の根ゆ藤縄をく〜く架を鉤りてゆ居く搔網
をもるも稀ゆあり幾尋ともゆ紀深淵の上ゆこのるをつりて身を置一條
の縄ゆ命をつるぎとゆくその業をゆもるゆ怖〜ともおゆ〜ぐるハ此事ゆあるま
るゆゆ〜





絶壁搔網の圖

魴漁打切の圖
狩之重図
魴洲を走る圖

○漁夫の溺死

或村ハ不祥の事多く夫婦一人を中ゆひ五ツと三ツハ有る男女の子を待る農人ありけり年毎ハ鮭の時ハ山べその漁をなして生業の助とせり此所いまだ岸阻なる故村のものゝ岸ふちの架を作りて撞網をなすなり絶壁の所ハ架を作るものもなけれバ鮭もよくあつまるゆえの男女ハ架をつりおろし一まちの縄を命の綱として鮭をとりけりさて十月の頃ハいとゞ雪降る日ハ鮭も多く獲易きものゆえ一日降る雪をも厭ず蓑笠ハ身をかくし朝より架ハありてさけをとり番ハとり合ふる時ハ番ハも縄をつけおけをハのまゝ架を鉤る網ハ縋りて絶壁を登りさて魚を引あゞるこつるハもゞりて登り下りもるもこまふ慣てハ猿のごとし物喰ふ時ものゞるこ此日も暮て雪荒ハありけれバ雪荒ハいとゞ鮭えやをきゞゆゑハふてびうの架ハやんとハふを雪荒なれバとて母も妻もとゞめんとするをきゝゞ炬を用意して架ハありてかきあとをせしハたてつてさけあまたえしゆゑ鶏飼の諺曲ハうふごとく罪も報も石の世も忘れたるかゝろくや時をぞうつる○かくてその妻ハ母も阿子ども寐ぬ寐ぬこの雪あるハ夫ハさゝを凍え玉ふらめ行むかふとて飯らんと蓑ハ笠の帽子をかゝり松明をてゝ二本を用意して腰ハさしかゝるハいとり松明をあげくさゝのぞき遥下ハある夫ハこゑをかけいとふさむらん初夜もいつまぎつんもとやゝやて飯り玉ハ飯もあてゝふして酒もゝとも置いりいざとり玉ハとのまつもゝるゞゝ撓も入るやうハありゝぞをも持来りとゝふも西おとゝの雪荒ハそよくもきこえゞ横こゑをあげくいゝバ夫ハをきつけよろこゞよ鮭ハあまたとりくるぞあもハうちよりてうまき酒をのむゝ今をこゝ捕てくんそちハさきへくまとゝふちゝゞ松明ハてゝふおりんとて燈るまく架をつりとめて綱をてゝ樹のまてゝふさゝをきくく別の松明ハ火をうゝて立ゝりぬこまゞ夫婦ゞ一世の別をなりける○さるわどハ妻ハ家ハ

かくり炉に火を焼たゝかせるものくせんとさぬぐゐにちつく待居うり
ゐ時うまごも飯りきてくるぞまちまびくふてびゝの所ゐいてりしふのた
さゝくるたのまつもゝえゝぞ持うゝこのまつをゞぐして下をゝるゐひりもよくハ
とゞうで夫のまゞうゝえゝうくまぞこゝ糸のゞぎりよゞどもてゝ(ぞさゝハ架ゐをゝぬ
ゐやさるゐてもいぶりしと心をとゞめくく松明をゝりてくしく登りしく跡の雪ゥ
あるやとゐてうをゝまゞばさいぜん木のまゝてゐさしぜきゝゝきてる炬ゆえいちく
ありてまゐ心つきく持うたのまつゆくく猶うくゐゝまゝ架をくしうる傘
のつる焼残りてありてまをゝるよりもゆせまりゝたまつてゐゆけいちて綱を
ゆきくり架いちく夫ハ深淵ゐ沈うるゐうゝゞひゐしいゐ泳をきりゆゝふとも簡
夜の早瀬ゐいちく手足凍え助りゝ玉ふ爲ゝ便ハあくゞこゝいくゐせんく姑ゐ
いひくけゆしと洞を雫ゐふくせく哭けくゞ我もとゆゐと松明を川(投入る身
を投んとゐるゞ又おもくくゞゐゞきゐとハ老る母さゐと推き子どもら伐

養ふものゐく手をひきく路上ゐ立平ゐらん死ゐるゐも死ゐるゞる身ゐ成る
くゐゆしく玉へゞゞつまと雪ゐひまゝゝゆけるつるゐもぶりつきこゝゐをあげく
哭ゐゐゐくりかくてもあくまもゞゐくく焼残りゝ綱をちくしゐりゐ暗き夜
ゐゝこのまつもゐく雪荒ゐ吹まくく洞もこゐるゞたりゆくゐくく立くりしゞ夫が
死骸さへゝえゞりしと其邪ゐ近き邊りの友人ゞ此頃の事とくきゝのとし物
ゞくりせり

○総滝

総滝とハ新潟の渓より四十余里の川上千隈川のひとり割野村ゐちゝき所
の流ゐあり信濃の丹波島より新潟まゝを流るゝ間ゐ流の滝をゐゝハこゝのゝ
ありその総滝とハ川ちゝハおよゝ百間ちくくもあるゞきゐ大ゐる岩石竜の如
くるゞとく水中ゐあるゐゐゐゐゐとしる水こゝゝゐ激しゝ滝をゐゝと雖ゝゐ
いとりて激浪ゐのゞりくゐゝ積豫ゐゐ漁師ども假ゐ柴橋を架ゝゝ岸ゐ

ちろき岩の上の雪をわりもてこれ居てかの撥網をうちさまゝど命の惜きゆや
おの〳〵己が腰ゆ縄をつけてきを岩の尖りなどゆ縛〳〵いくこゝゆ往来もする
ゆハ岩ゆ足のかゝるべき所をうゞりゆ作り岩ゆとりつきて登り下りをうも若
一わ〳〵を過つ時ハ身を粉ゆ碎きて滝ゆおちいるめりその危きすいん方み
余前年江戸ゆ在〳〵時右の事を先の山東翁ゆかたり〳〵ゆ翁曰世路の難
ハ怒滝よりも危くこん世ハ足ゆとをゑて渡るべきゆやとく笑て格言なりと
耳ゆとゞまり〳〵今偶然おもひいゞ〳〵るゆ多おもるせり

○魴漁の類術

○當川 三角なるあみをもてとるをいふ ○追ひ川 水中ゆ杭をうちあみを水をうちさけをおひたゝ ○四ツ手網 他国ゆおなじ
○金鍵 水中のさけをうゞかゆうけてとる ○流し網 きりわたしあみをもの長き二百けんあ
○籍突 水中のさけを見をまち〳〵ゆそのあやまんこをもまつこれをもるゆなり
といへども詳ゆ解んハ駁雑けまべその網をゆ〳〵せり

○魴の洲走り

きけのすゞ〳〵ゆハ雪前ゆ河原などゆあるるこかをあをゆせゆるを人ゆも追
いまゆゞして水を飛離まとく河原ゆのゆり網ある所をこゝゆく水ゆとび入りて
あをを退るこ此時ハ大魴きゆもてこゝて水をたゝるるをべよりゆる小魴など
后ゆ随ひくのゆり河原をたゝる事四五間ゆもぎざるども箭のごとくして人
の足もおよびがて〳〵きゆもてゝむ大魴も〳〵物ゆさゝりて横ゆ倒るゝ時ハおとり
まゝてゆ入る魴もおゞ〳〵こまをて〳〵ゆ人の捕るを俟ごとくしてゝるゞ
〳〵て手も濡さゞ二三頭のさけをうゝるゆりかを足無して地をたゝを倒まて
ふゝたび起ざるゆど奥族中比ゆべきりのゆきハ奇奥といへべ〳〵

○毒氷

前年牧之江戸ゆ旅寓の頃文墨の諸名家ゆ謁して書画をもひ〳〵時前の
山東庵ゆハ交情厚くゆりて毎〳〵訪ひ〳〵ゆ京山翁當時ハいまゞ若年ゆ

りしがある時雪の話につけて京山翁いへらく今年正月友人らと梅見にゆきしかへるさ青楼にのぼりその暁雨ふりしがほどなくはれけるゆゑ青楼を出て日本堤にきたりしに堤の下に柳二三株ありしが柳にかかりたる雨垂氷となりて一二寸づつ枝毎にひしとさがりたるが青柳の糸に白玉をつらぬきたる如くをりふし旭のかがやきたるはえもいはれぬ好景なりし此糸堤の茶店にやすらひしゆゑひそかにながめてそぞろに詩を作りし事ありきこれ餘寒の暁に雨のこほりたるなれる気運の機工を得てかかる奇景をみせたるなりとて珍しがりて語りしが暖地の人はめづらしくもおもふべけれど我国の垂氷に比ぶれば氷筋の一屁と心にをかしとおもひしがいはざりき○そもそも我国の垂氷をいはんに他は姑くおきてまづ我が家の氷柱をいはん表間口九間の屋根の簷に初春の頃の氷柱幾條もならびさがりたるその長短はひとしからねども長きは六七尺もさがりたるが根の太さは二尺めぐりにひとしきもあり水晶をもて簾子をかけたるやうなれども我国

の人は稚きより目なれてゐるゆゑなればめづらしからぬゆゑ垂氷を吟咏に入るものなし右のつらら明りにさはるゆゑ朝毎に木鋤にて打おとさせ又家峯の谷になりたる所を俚言にだぎ＝といふだぎは春解そめし稀の雪のこほりたるに凝るゆゑつららは簷よりも大に下にさがりたる所は二丈もさがる事あり次第にふとりて大になるも物にさはらぬ所はそのままおきしをいつか打砕く時は大力の男抗などにてよつてかかりに打てきりくだきおちてくだけたる四五尺なるを童らが打よりて手遊の雪舟にのせて引きありき遊ぶもありこれらは我家の氷柱にて珍らしからぬ宮寺のつららは猶大なり又山中のつららは里地に比しがたし

○笈掛岩の垂氷

我が住む塩澤の北三里余に清水村といふあり此村持の山に笈掛岩といふ在高さ十丈あまり横二十五間あり下に谷川あり登り川といふその形ち屏風をひらきたてたるがごとし岩の頂き反り伏して川に覆ひたる下は四五十

人坐して狭からねど少く余裕あるがごとし我が上越後にて名をよぶ奇岩おほき中にこれもその一ツ也此笈掛岩の氷柱こそ我が国の人も目をおどろかすなれそのつらゝあまた垂下りたるなかには長さハ十丈ばかり太さハ二三抱もあるべし垂たる形状ハ蝋燭のながれてたるやうなれど里地のつらゝとちがひ屈曲種々のかたちをなして水晶にて工に作りなしたるがごとく玲瓏として透徹るが旭の暉たるハものに比ぶべきなしと此清水村の里正阿部翁の話のごとくにてきゝぬ右のつらゝこそ我をはじめつらゝハめづらしからねバ強てゆく人なし此清水村の阿部翁ハむかし世に聞えたる阿部左衛門の尉が子孫也世々清水越の関守なりしところに長尾伊賀守の城跡あり

○滝の氷柱

我が上越後ハ山岳つらなりたれバ滝多し滝ある所に夏木の大樹ありて春にいたり枝につもりし雪まづとけて葉をいださぬ木の森をなしたるに滝の水烟枝に潤ひしが雫となり氷柱となりて玉簾をかけ周したるやうなるハことにも又たとふべきものなしさてまたその滝にもしたる水氷柱となり玉簾の内に滝をかくしたるさま四辺ハ乱瓊細玉の雪中にかの玉を出すといふ崑山もかくやとおもはるゝ奇景も猟師樵夫のやからなる人稀にこれを見る暖国の人にみせなバいかにめづらしとかおもはん牧之拘崎より妻有の庄へ山越したる時目前に見たる所也

○雪中の寒行者

我が家に江戸に二十年居たる僕ありしがかたりしに江戸に寒念仏とて寒行をする道心者あり寒三十日を限りて毎夜鈴が森千住にいたり刑死の回向をなすそのさまハ股引草鞋にてかるくみに着てつとむるなり又寒中裸参りといふあり家作にかゝはるすべての職人の若人らがする事なりそのさまハ常より長く作りたる挑灯に日参などの文字をかくなし

文溪堂蔵

ぐるを持裸にて鐃をふりつゝとくちしまきくはおひくにこゝろざす所の神
佛へまゐるとまゐらんとする時ハかならず水を浴ぶ寒中の夜ハ職人も西東へ
はせありくとくさまり我国の寒行ハ事ハこれに似てその行ハすこぶる異
也我国の寒中ハ所として雪ならざるハなく寒気のはげしきことハまへにいへるが如
しその雪をふみて毎夜寒念佛又ハ寒大神まゐりとて寒中一七日或ハ
三七日心々に日をかぎりておの〳〵が志を神佛へまうづおほくハ農人の若人ら商
家のわかいしゆもありひるハ業をなして夜中にまうづる也昼のいとまをおほく
日に三度づゝ水をあぶ猶あぶるハ心々也禁じて身を拭ふ事をせずぬれたるまゝ
にて衣服を着て坐するにハ藁の穂の方をうしろを扇のやうにひらき
てこれに坐す（これハ七五三のちゞみとぞ）かりにも常のごとくにハ居らずこのゆゑに此束縛する
稿ハ帯にさしはさみてあるぞまた行の中ハ无言にて一言もいはず又母のやら妻さ
りとも女の手より物をとらず精進潔斎ハ勿論之他の人もかれが腰にさはらせ
ざることをなさく行者なる事をしりむごんなれバ言語をかけず人々つゝしむ也
ことゝハなし行者にことバをかけ行者あやまりてことバをいだせバ行破るゝ
ゆゑそのはじめより行をしなほすゆゑ也又无言の行ハせざるもありさて夜に入
れバ千垢離をとり百度目に一遍づゝかしらより水をあぶるゆゑ十遍水を浴
身をのごはざるものをおほふ雪ふるとも蓑笠ハあるひハいろ〳〵なる雪荒
にもいとふ事なく鉦うちならしつゝゆくこれにハかならず同行のものある故
そのかどにいたりて称をとなふれバ同行も家にありてかの称をうちあはするとし
て出きたる家に入らざるものハこの行者女にあらば身のけがれとして川に入り
又ハ井戸をたづね水をあぶる事まへのごとくして身をきよめさてまゐるなり
この由ゑに行者の鉦の音をきけバ女ハまへ〳〵門へハいでず道にあへバ遠くに
かのかねをきゝてかたく行の内人の死したるをきけバたとひ二里三里ある所
にても其称にしる人しらぬ人を論ぜず志願の所にまうでゝ皈るさへ其

寒行者威德之圖

笈掛岩大氷柱圖

家ゐいとりゆんごろゐ回向をこまをも行の一ッともさるゆゑゐ不幸ありて
日のうちゐいくゆそハ行者のきてるをまちくるものくゐせんゐどらゐゐも清くくして
待こ寒念佛寒大神まゐりの苦行あくまもく件のごとくゐまゐ他国ハきう
ぞ江戸の寒念佛裸まゐりゐ比ふまゐまゐるもぞ異こかる苦行をゐもゆゑゐ
やその利益の物然事を次ゐ書つ苦行して祈まゐいづまの神佛も感
應ある事を童蒙ゐ示ま

○寒行の威德

近來の事ありき我ゞ住塩澤より十町あまり西南ゐあうて田中村とゐふ
あり此村ゐ右の寒行をもる者ありけりある日朱俵を脊負ひて五六町へで
てる中村といふゆくその道ハ三国海道なまゐ人あくも繁くまぐく雪道ハ
人の蹈てゐる跡のみをゆきてもるゆゑいうる廣き所も道ハ一條ゆて其外
をふゐゐ腰をこえく雪ゐふこ入るこそゆゑゐ重荷なぞ持るハこと武

家こうとも一足蹈退てもの〻ゆき道を讓るゞ雪国の習ひとかの田中の者一人
の武士ゐゆきあひ重荷なぐくもこゐくより一足ふこのきさるゐ武士ハ声を
あらゞ脇ふまとゐふ今ひと足ふこのくゐ重荷ゆゑこと〻雪ゐもちゐんと
おもふゆゑいくゐせんとこゐくゐを無礼ものゆと肩をつきてるゆゑ俵を脊負て
いこぞこうゞき雪の中ハとこゐゐ轉び倒まくゐ武士も又人ゐ投らまく如く
倒まけまゞ田中の者ハ早く起て后もゐぞくしていそぎやきけりかるゐとくゐゐど
田中の者こくゐ来り武士の雪中ゐ倒まく起もわゞくぎるを不審立りてゐゐ
ぞ病平ゐとゐハゞ武士こうるきこゐくしてゐこくくまくとゐふその身色ハつ絲ゐう
絲ど病人ともゐゐゐぞいぎとて手を揉こ引起こんともるゐ手をのばきぞ抱えゐ
ここんとまもゐどもゐきぞ猶力のゞぎりゐこきんとまもゐども重き幸大石の如く
ゐて身を動ぞこハ不思議と驚怖るをゐこく武士ちゞくの事ゐくくゞ五体
もこくこく動く事ゐうくぞとゐふ田中のものこの武士ゞ朱俵を脊負ひくものと

いひしをきゝて心ゐかゝえあるべきさとゝ心づきことゝなるゝ行者の罰なるんと
行者なるあゝまをゝうきをまもかまびやきゝる中村〳〵やくものゝかの行
者をたくつまきてんゝび玉〳〵てゝりハ程ちゝまち玉〳〵とてまやきびて行者
をつまきてゝりけるべ武士ハ手をもりてゆるゝ〳〵とゝふ行者ハいゝりゝる色
もなくゐゐともいゝるゞ衣服を脱てかゝへの水楊ゐゝけ赤裸ゐゐりて水を浴て寒
まゐりゝる方をゐゝをゞゝ武士の手をとりて引起〳〵けるべゐゐのくもゐゝか
きあゞりいゝゐゐも耻ゐるゐゐゐて礼をのゞゝ立さりけゝることゞ常ゐ我ゞ家ゐ来る
田中のものゞかゝるり

○雪中の幽霊

我ゞ隣驛関とゝふ病ゐつゞきゝ〳〵関山とゝふ村あり此村より魚野川を渡る舟
き橋あり流と急なるべ僅の出水ゆも橋をなゞもゆゑ假ゐ造りゝる橋なる
ど川廣けるべゝもゝゞかゝるゞ雪の頃ハ所のもの橋の雪を掘て途を作る

ども一夜の内ゐ三尺も五尺もつもるゆもあるゆゑゐ日毎ゆもわゝぐるべ橋幅の
狹きゐ雪のつもりゝる上をゝてゝるゝるべ渡り慣るものをゝ過て川ゐおち入り
溺死をるものも間あり○さて此関山村のゝゝとりゐ獨り草庵を結びて
住む源教とゝふ念佛の道心坊ありけり年ハ六十あまりゝゞ念佛三昧の
法師ゆゝ无学なるゞもその行ハ頑僧ゆもをゝ〳〵少ぎるる僧なるべ年
毎ゐ寒念佛の行をつゝゐ无言ハせぎるゆゑ夜毎ゐ念佛して鉦打なるゝ
ものゐまゐりゝゐくゝゝ二夜ゐ一度ハかの橋ゐ立ゝ年頃おなじゝる者の回
向をゐゝ〳〵ゐ今夜ハ満願とてかの橋ゆもいゝり殊更ゐつとゐて回向をなゝ
鉦ゝちゐゝゝて念佛しけるゐ皎ゝゝる月遽然ゐ曇りて朦朧ゝりこゝいぶ
ゝゝとゐもひゝゐ水中より青き火閃ゝとゐえあゞりけるべゝ亡者の陰火な
らんと目を閉てかゐゐちゐゝゝ〳〵念佛して目をひゝきゝゐ橋の上三間を
ゝり隔ゝく年齢三十あまりとゝゐる女白ゝ青ざめゝる面ゐ黒髪をゝゞゝけ

今氷よりいでたりとかぎりなくあはれに濡たる袖をかきあはせて立り常人なれバ叶といひ
て逃べきにさへあらねバその方に身を對てつらつらみるに斯闇くありしにかゝる
ものゝありありと見ゆるもたゞ人ならじと猶よく見れバ体ハ透徹やうにてうしろに
あるものも幽に見ゆ腰より下ハありともなしともおぼろげにこれこそ幽霊ならめと
しきりに念佛しけれバ移歩もなくまへにすゝみきたりてかすかなる細微なる声していふやう
わらハ古志郡何村村名ハもらすの菊と申ものにて夫も子も冥途にさきだちて獨り跡に
のこりかなしき烟りさへたてかねてありしかバこれよりちかき五十嵐村に由縁の者あるゆゑ
助けをもとめんとてこの橋をわたりかゝりあやまちて水に入り溺死たるものにて今夜ハ四
十九日の待夜なれど世にありてしたしき人ハ誰ありて一掬の水だに手向る人
なしさるを御僧のこゝにきたりて回向ありつる功徳によりてありがたく佛果
をばえたれども頭の黒髪が障りとなりて閻浮に迷ふあさましさよ此上の願ひ
にハ此くろかみを剃こぼして玉ハれかしあな悲哉とて自ら袖をあてゝなげくと

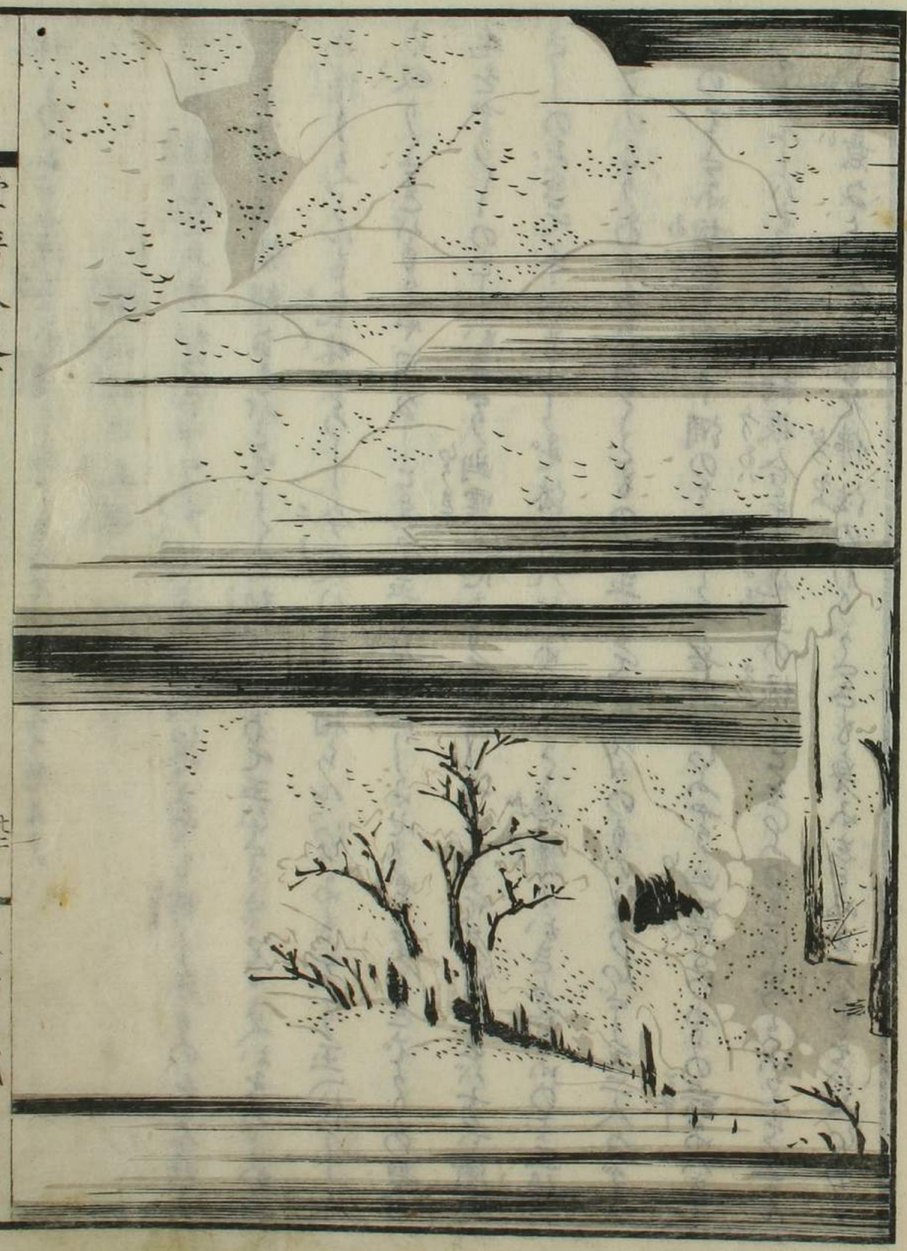
泣けり源教いふやうそハいと安きことなれどこゝにハ剃べき物もなけれバ
あすの夜こゝにきたれ関山の庵へ來りて望をかなへまいらせんといひけれバさも
うれしげにうなづくと見えしが烟りのごとく消うせ月ハ皎々として雪を照り
○さるほどに源教ハかへりて朝日人をまちて回來親しき同じ村の紺
屋七兵衛をまねき昨夜かうかうの事ありしとお菊が幽霊の事をこまかに語り
お菊が亡魂今夜かならずきたるべしかゝる事ハ佛に疎き人らにもしらせきかせて
教化の便ともなるべくいかゞどもうしろにみとゞけたりといふ証人なければ人々
空言とおもふらん和殿ハ正直の聞えある人なれバ幽霊の証人にたのみ申ことなり
も人の為なりといふ七兵衛も此法師とかねてしたしきなかにて志かも念佛の信者な
れバ打うなづき御坊のたのみとあれバいかで固辞申さん次とよきころに來べし
何方にもあまし隠しおくべしとつげ申さんさればよ佛壇の下こそよきかくれ所
なれかまへて人にかたり玉ふなかれさらバ幽霊を見んとて村の若人らが來べ

さぞ心えてゐハとて立帰りぬ

○斯てその黄昏ゐいとり源教ハ常より心して佛ゐ供養しそこゝ清らゐ
ゐ〜経を誦〜居とり七兵衛ちやきてゐぬ誦〜をゐりて七兵衛ゐ物をどくさせ
さて日もくまこけまバ佛檀の下の戸棚ゐくゐをとせ覗くづき節孔もありさて
佛のとり〜火も家のもさぎと幽ゐゐ〜佛のまくゐ新薦をきて幽霊を居
らもる所とり〜入り口の戸をもをとり〜あけき研こたる剃刀二てうを用意
し今やくと幽霊を待居とり此夜ハきゐゐ雪ゐありてもとり〜あけきたる
戸口よりもふりこむ風ゐあり〜もきこえんとする夜戸をさし炉のそこゐわり
て戸棚の七兵衛ゐいふやう。蒲團ハききとりそこゐありて眠り玉ふな。いゐ
でさることせん幽霊をえんとかりバ心ゐ念佛するのミ御坊こそゐせをいでゝてゐ袖
こぎ玉ふゐゐ。呼。音とり〜きづゐゐ幽霊をゐるともきくく音をこそ玉ふな。
とのひつ〜手作とて人ゐもゐひとり烟草のわゐく剃とるもや吸あきく呻ゐ会

佛を嘗まぜ頷ひ抚まゐ〜きゐ鬚をぬきく居とり雪ハ雪簾ゐあとりてさゐくと
音のふのミ四隣をけまバ寂とりて声ゐ〜や時もゐりけり ○さて幽霊ハ影も
ゐえぞ源教ハ炉ゐ温りて睡眠をのとゐ〜居眠り〜つ終ゐ倒ぶんとして目を
ひゐきゐゐ菊が幽霊何時ゐ來りて佛ゐ對ひまうけゐる新薦の上ゐ坐り頸を
低てゐとりさゐの源教も戦慄せ〜ぶ心をきづめてゐくこえきとりつとこのゐゐ幽
霊ハさゐゐことをひぐきぞたぐこハ昨夜えとるゐこゐぞ源教手をそぎ盥り
水をくことり剃刀をもちて立とりつまバ打とぐ〜ゐ髪つゐのゐるゐりぬまて
ありさぞ雪ゐるゐをきとり〜このゐきゐ〜もゐ〜心ゐ有ゐやうこまゐ髪の毛
をのこ〜とゐゐ〜后のきゐ〜とせぐゐ心して剃刀をこぐせるゐそりかこも
髪の毛糸をつけく引ぐどくゐまぐ懐ゐ入る女ゐまバ髪の毛を惜むゐんと毛
を指ゐかゐこと、剃り〜ゐ自然ここゐゐこくゐこくして剃り
をとりゐづゐもこ〜の毛ハやゐやことりとゐつ幽霊ハ自く癒ゐ掌を合せ佛を

雪中幽靈之圖



拜ミつゝもぞゝ次第ハ薄くゐるとつゝゝ〜ぶきえうせゝり

○関山村の毛塚

かくて絆屋七兵衛かゝまゐる戸棚よりをひいでさても怖しきものをゝ出る
車ゝみいゝハ法師ゐまバゝてようゝぞ剃刀をあて玉ひるゝぞゐるさゝおそろ〜かり
き獨りゝゝんも気味ゝろ〜今夜ハゝてハ宿らん いろゐもやどり玉へ待し人
の皈りゝまバゐゝゝ用ゐ〜ゝまゝゝ玉へ后の証しハせぞやゝてゝまだりの髪の
毛をゆう〜のゝ〜きゝり幽霊も心ありてのゝ〜つんゝてゝえせけまバ七兵衛を
さ〜のぞきて手ゆもゝゝもぞ法師ハ紙わつゝく佛檀ハきゝ夕間ハのゝ玉ひ〜
酒ものゝりあり番ハゐくゝものゝ玉へゝてゝいきゝゝのものゝりいでゝて二人ゐゐゝ
炉のまゝハ胡坐ゐきく酒のゝゐゐゝ七兵衛がゝみやう幽霊ゝゝゐのの話ハいきゝ
つゐゐゝ〜ハゝゝめてゝ袖振合ゝも他生の縁ゝゝそのハゐまいゐゐゝハえゝぐさん
も本意ゐ〜今夜ゝゝ佛法のありゐゝゝも身ハゝゝまバあゝハ世ゝゝり

ゆゝ百万遍をゐ〜てお菊ゐ佛果のひゝゝゐゝハせん源教ゝハよ紀切徳ゐゝん
古志郡のお菊ゐいゐまいをゝゝぶけゝゐゝと人ゝハゝゝり玉へ愚僧もゝゝゐを
証人ゝゝて幽霊をゝりて教化のゝゝりハせんもでハもゝ〜もかゐるゐあり
〜と砂石集ハゝゝゐゐ人ハきゝゝをおゐろげハおゐえゝ一ツ二ツかゝり
きゝせゐゐゝて夜もふけまバ一ツの夜具をゝりゝてゐゐきゝゝふ〜けり
○さゝてあけの日七兵衛源教を伴ひゝく家ハ皈り四隣の人をあつめゝくハ菊ゐ
幽霊のゐをゝりけきハ源教懐よりゐの髪の毛をゝりいでゝてゝまゝハ人ゝ
奇異のおゐひをゐ〜ぬきゝて七兵衛百万遍のゐをいひ〜ハあつまり〜着ども
そゝゝゝよゝき善行ゐまゐひゐゐゐ〜玉へ茶の子ハゝゐゝゝりゐちゐん御坊
ハ茶の用意を〜玉へ数珠ハ庵ハゐりきゝゝもおゝゝのを借ゝゐちゆん
猶人ゝをもゝゝひあゝせゝゐゐんゝゐゐハ七兵衛ゐ妻もゝゝゝハあり〜ゐ夫ハ
むひゝゝのゐハ餅をつきゐゐ〜ゝゝゝむいゐゐゐもゐゐんゝゝく俄ハをのゐよ

ゐ〜をゐけり○かくてその夜源教が草庵ゐ人〜あつまりゐ〜こりあひて念佛をけまばゐるくゐにぎ〜き佛ゆえけり此事てか〜こゐ傳へ聞えく話柄と〜けるぞこゐぞ〜あるものゐらゐゆう源教がもち〜かの髪の毛を瘞め石塔を建て供養せばゐ菊が幽魂黄泉地のかげゆもよろこびゐんとゐひ出ゐふおも〜心の人おまさおりてそのゐとのひ終ゐ石塔を建んともる時ゐいさりて源教ゐふやりかゐ夏の導師てさんハ我がもとぶ所ゐあるぞ是最上山関興寺の上人を招請あまて〜とゐふ人くさ〜ぶとてか〜こゐいこう事のよう〜をつげてゐ菊が戒名をゐとあゐ菊が溺死こゐる橋の傍ゐ髪の毛を埋め石塔を建る事まぐ〜人を葬ゐるが如く〜こゐみあつまりて祈んぐこゐゐ佛事を營ま〜ゐかの絆屋七兵衛ハ世変より發心〜て石ゐ出家〜けるとぞこゐひとむ〜まのゐとける関山の毛塚とて今ゐ残ま〜り

○雪中鹿を進ふ

他国の人越後ハまぐ〜大雪の国とおもふめまどさゐあるぞまゐゐもゐる如く海濱ゐ近き所ハ雪浅〜雪ふるきハ奥沼頸城古志の三郡或ハ荊田三嶋の二郡所ゐよりて深浅あり蒲原ハ大郡ゆて雪薄き所ゐまて東南ハ奥羽ゐ隣りて高嶺つゐるゐゐ地勢ゐよりてハ雪深き所あり雪深き所ハ雪中牛馬を駆ぎらんとるまぐ人ハ雪ゐ便利のさきものを用ふまでも牛馬ゆハこまをやどとを事あさハぞも〜雪中ゐこまを進バ貢のあるうまぞ雪ゐうづまらんさまぐつゐる事ゐるざるこおゐて十月より歳を越えく四月のそ〜めまぞハむゐ〜ゆひく〜ゆ〜ゐひくのこと〜こまこと暖国ゆハゐき難俄の一ッこさて獣ハまゐゆもいゐるごとく初雪をそて山つゐゐゐ雪浅き国へ参るゐゐまぐ〜こまを將る事あり熊のるハ上巻ゐ〜ゐり野猪ハ猛きゐゐ雪ゐ〜くこゐも得ゆゐゐ鹿羚羊ゐどハ弱きものゐゐ雪ゆゐ得ゆゐ〜鹿ハこゐ〜高脛ゐるゐゐ雪ゐそ〜るゐ人よりおそきゐ伏こう鹿ハ深山をゐのまぞゐゐゐハ端山ゐ居るものこまぐ〜物ゐ慣

まばその妙あり山獵ハ慣る者ハ雪の足跡をみてその獣を知りまことに
まハ今朝のあ〜あとこハ今ゆき〜あとその時をも知る之三国嶺より北
（つゞく）二居の人ところの鹿ゐひきてをきゝ〜ハひぎ鹿ゐひゐゆんとて
てをひあハせおの〜雪を漕ぐべき里ことぶこぐとかどハ身をうゑ山刀を
さ〜鋏炮手鎗又棒などを持て山ハ入りその足跡をさぐ孫あとハ随つゞいてゆくも
鹿をゑるかまを人をゑて逃んとかまを人のえ〜るハおよぶも鹿ハ深田をゆく
でて〜終ハ逆ひつめ〜まて〜ところをゑるひハ剛勇の人ゆゑ角をとりて孫ぢ老
山刀ゆて刺殺もありとゞまてハ暖国ハ無きゆゑ

○洵り山の大猫

我が隣驛関ハちき飯士山ハ続く東ハ阿弥陀峯とて樵る山あり村〜持分この
定あり二月ハいとう雪の降止る頃農夫ら此山ハ樵せんとて語らひあハせ連日の
食物を用意〜かの山ハ入り所を見立て假ハ小屋を作りてを寐所とす〜

毎日てかゝとの木を心のまゝハ伐とりて新ハつくり小屋のわとりハわまと積
ちき心ハ足るゆどハいてまばそのまゝハ積おきて家ハ飯ることを洵り山とハ
山ハとまりゆゑ変をゆもゆゑ之さて夏秋ハいてまば積おきてる新も乾ゆゑ牛馬を駆ひく新を
家ハ運び〜用ハあつる之雪ふきき所ハ雪中ハ山ハ入りて樵る事あたゞる
ゆゑの所為ハ〜我国雪の為ハ苦心るの一つ右ハいふあまゞゞうハ水ゆく谷
川あまでも山よりハ数丈の下をゆゞる翼ゆけまば汲ことあたゞこと年歴さる
藤蔓の大木ハまとひさが谷川へ垂下りさるあり洵り山〜て水汲りの樽を脊
ハ〜勇ひ此ふぢづるをさまりとて谷川へくだり水をくゝてさるの口をつめて
脊ハひふてびふぢづるハ縋りてのぼる雪機をのぼるさゆゑとまり山をまるものこの
ふぢづるゆけまば水をくもゆゑもとりや縄を用ふとも此藤の強ハまとぶまど
このゆゑハ洵り山まるものら此蔓を宝のごとく尊ぶとぞひとせ洵り山〜
さるもの〜かゝ〜ハこと〜二月とゆり山〜時連のもの七人とゝハとゝあり

木を伐りて居とりしふ山くゐ響くやどの大声して猫の鳴しゆゑ人くいもそ
おのきるる小屋ゐあつまり手ゐくゝ斧をうち耳をもまりてきけばその声
ちくゝふありときけば又遠くゐ鳴とわゝときけばちくゝ あまりの猫うとも
ゝ其声ハ正ゝくゝ一ッの猫くさきをぐゐふ又せぞうきそのち七人の
ものおそるくちくゐきろる形ゐいうてゑるゐ凍る雪ゐ踏入もる猫の足跡
あり大さつ絲の九盆ゐどゝゝとくうり紀天地の造物かるものみゝともいふ
ゝゝゝぞ我が友信州の人のかゝりゝハ同じ所の人千曲川夏の夜釣ゐ行ゐ人の
三人もをるべきゐどのをりよき岩水より半いでるありよき釣場ありとそをふ
のゐりてつりをとをくゐうゝゐあゝゝゐてその岩ゐ手ゐゐどゐ光るもの
二ッ双ゝくいできりこいうふとおもふちゐ月の雲間をいでるゐようをもゝ
岩ゐハあゝゝ大なる蝦蟇ゐぞありけるひゝゝものハ月ありけり此人いきる心
地もゐゝ何もうちもそゝ逃げきりゝゝとうりぬ

○山言語

右の絵り山もるハ此地ゐるぞゝぞ外ゐもそる所ありり小出嶋とふあゝり上越後
山根の在くゐそもそるあり もゝゝく深山ゐありて事をゐそふハ山ことゝのあ
りてことをつゝふ忘まゝく里のことゝをつゝふ時ハゝゐゝぞ山神の祟りありと
いひつゝふ他国ハちゝぞその山言語とハ○米を草の實○味噌をたぶら
○塩をかくゐり ○焼飯をざうう ○雑水をぞう○天気の好をゝゝぐい
○風をそよ○雨も雪もそゝぐゐふとゐふ○蓑をやち ○笠をてゝう○人の死を
まゝゝと又ハへもと○男根をさゝち ○女陰を熊の穴此餘あまゝありさの
ゝハとそちるゝぞ女陰を熊の穴とゐふをもてゐもふゐゝのことゝハ商家の
符調とゐふものゐおゝゝるゝゝかるゝことゝを山ゐくゝつゝるゝゝゝ山神の祟り
とゐふとゐふハ信ゝけゝぞ神の変ハ人慮をもてゝるゝゝゝ誣ゝるゝ
物をや

雪窓座頭を降る圖
大

○童の雪遊び

我が郷里は雪深くして例年十月より翌年の三月を終るまでは歳を越して半年は雪に埋まれて生涯成長するまでの雪遊びを事とせざるなくして暖国の人は雪中の暖国の人はいかばかりざるあそびありまづ雪を高く掘揚げ上るを童ども打よりて手あそびの木鋤もて平らかにしてふるひ土塀を作るやうにまわりの囲をつくりそのあひだにも雪にて壁めく所をつくりて入口をひらき隣の家とそれぞれの囲にも入口をひらく此内に宮めく所を作りまた階をまうけ宮の内に神の御体ともなるやうにはくりもの多くを天神なと称し延宝どもきろめ物を煮る所をも作るもべくこの雪にて作りこれを雪の堂又城ともいふ児曹右の雪の堂の内にあつまり物をどを煮て神にもさげこみ

よりてうちくふ又間にはそこを作りこれとなりの家に准(さなぐ)の事をかしてこれもまた遊ぶあそび倣ひ斯作りこれを打こぼつをもあそびとす又他の童のことにはちくにおそどさなに作りこれを城をかとそどりひてうちくるふもありそのまくにおくもありおのを牧之も童のころにくるあそびの大将をせしむすく犬馬の齢を歴て今は夢のやうなり

○雪に坐頭を降す

まへゆもいるごとく雪のうちに春をもとるゆゑ歳越の日をばいづるの家にてもことさらに雪を掘て窓のあるをとりのくる雪も年越の事なれきにまぎれて取除をこそ掘揚の屋上にひとつき雪道歩行にさまりあしき所もありひとせ歳越の夜余が点をもとる俳諧の巻を懐にし俳友鬼角子を伴ひその巻の催主のもとにいたりて巻を主に遣しけるとこびて今夜はめでたく紀夜なりやるく語り玉へとく主人の妻娵娘も打まぎり

でもてあ〜けりさてさゐぐの雑談のあるふあるづのつま牧之ふ歳こ〜の
夜ハ鬼の來るとて江戸ゆく厄拂ひとのふものありて鬼を追ふるをあり〜ろく
いひさて〜物をひきとき〜しぶむり〜もさるゆあり〜や鬼の來るといふ空言
も吉きつえゆやと問ふ余こえきそいあるづが持玉ふ年浪草ふ吾山があま
〜ハ志るせりの書を見玉へとのひ〜ふ鬼角子ハ酒ふも醉こまび戯言ていふ
ゆう鬼のくるといふるいでそこごとあるん女ゐどのあつまりをる所ハ鬼の好
む所こ鬼のくまバこそそ〜こ〜の豆まきを鬼やらひといふゐる俳諧の季よ
せふもええこりとふ母のかこふふねさる十三ふゐる娘がふこぬ〜その鬼を
え〜ゆあり〜やえこりともく鬼ふもさゐぐあり青鬼赤鬼ハ常のゐる
白の白くてやき〜きを白鬼とのひ黒くて肥太りこるを黒鬼とふものを江戸
ふ在〜時厄拂が鬼をうつこえ西の海へきりと投こるをえこる事ありその
鬼ハ黒こり〜江戸の歳越ふえ夜ハ鬼のありくるまバこそらのこ〜ふハ

鬼ハいこてこもありくで〜あり窓よりのぞやこそんとこふもまふおこせバ
よゆももまもゆも空言のこゐふゆと口ふハいへど母の左右ふよりつきこくおこそく
さゐこけりかるをり〜も人くの座りぬこる后の方ふこきあり窓あり〜
がきび〜ゆ音ありてまどをかぶり掘あげの雪ぐこくと崩をおちこる中ふ人
の降りでりけまバ女ハこゐ吁とのひてうつぶして愕然迷ひ男ハこゐ立あが
りておどろきけり下部らもこのおとふこゐをせよりて崩をおちこる雪ふきこれ
る人をえまバ世家へも常ふきこる福一とのふ按摩とりの小座頭こけり幸ひふ
痴もうけどあこゐ抚まふ〜腰をさもるこふ福一ありとてこゐるこくバおのまも
ここふ下部らふおちこる雪をとりのけ窓をもりふつころひゐるどをあづの妻
こここそいふ福一鬼角どの鬼のをゐ〜ゆくをこまて〜ふ鬼ことおゐひく
皆きの式ひゆせりめでこきこ〜の夜ふ盲が窓よりこりてここ〜ふいまふ〜きる
ゆりこ〜〜いでゆけとてきこりふきこりけまバあるづさゐきこりのひぞ福一

いろふして窓よりかちいりしてどいてさめしに所ハいろゞ今夜のおめでたをやさんとてことやどハいでてまなゐかつのあとざふや掘あげの道きのふとハちがひてあしのとあしあきまばあやまちて轉るが窓をもかしやぶりてかち入るこゝろさふきまてるあハれいろゞやうしに玉ゝとハいふ娘も娘も口をたゝく鬼ゆやとていろゞくいもびえてより慣き育めと腰立てハいふあゝのつまいりをゆめゞたゝもこゝしの吉方ゐむてる窓をやぶり月のあきものゝ入りしハいろもくいまゝしきるこゝとりしこゝまとのこりけまべ鬼角ゝこゝゝより福一まづゝゝ又こゝよのうゝふとびしてかくでしとゝいゞ福一かしらを立てものを按ぎるこゝゐありしゞやゞて鬼角ゐむゝひ哥一首ゝこゝいゝきて玉ゝまとゝいふ此福一ハこゝしろけまど俳諧もぎま哥をもゝむものかまびあゝゞこゝおりしろしとて鬼角がかきてるをゝまをてきけばそのうこゝふ吉方ゝゝ福一とゝふこゝゝ餅ゝが入りてありもちゝくゝはめでさゝ

このうこゝふゝ人くめでこゝりくゝときゝうゞ手ゐど拵ていきゝゝろこびゐてこび盃をめゞこゝしけりあゝしゝんつきの羽織を娶ゐとりいゞをせこゝ哥のろくとて福一ゐとゝゝせけまバ膝ゐのせゝゝゐでさゞりあやまちの高名ゐつゝとそゐこゝたゝけゝゝろこびつゝめでこゝ歳越ゐきをちゞめせんとて羽ありきゝくゐできゞりゝゝちをつゝりて猶ゝろこびけりゝ之が吉瑞と成名此年此家の娶初産ゐ男子をまうけ産ひもゐくてゐひゝちゝ三ッのとゝ疱瘡もかろくして今年七ツゐゐりぬ福一ハゝる伶俐ものゐりしゐ今江戸ゐありて宜ゐもゝこゝと聞ぬ目でゝ記事ども有りけり

画者　少年　京水百鶴

文溪堂近刻書目

北越雪譜後編 三巻

越後 鈴木牧之編撰
江戸 京山人百樹刪定　京水百鶴画圖

右前編ふるまてる雪中神社の祭事佛閣の法會民間の行事大小雪車の制作用狀雪中種〻の奇談珍説を記し雪の消終るまでを圖ふあらはし北越の雪中を目前ふ視るが如き書せ

骨董集二編 上帙二巻 下帙二巻

醒齋京傳先生遺稿
京山人百樹翁補訂

右舊板曾て本舗ふ購ひ得うるを京山翁ふをふ〻醒齋先生の遺稿を索め翁正ふ補訂を下し〻る或上梓せ

女粧考 五巻

京山人百樹編

上古より近古までの女の風俗の古圖をのせ古書を引く其風俗の沿革を考へ鏡櫛をそなへ女の容飾の道具をゝびふ奥脂白粉の始原眉を拂ふ支鋏漿をつける事のゝる其譯説をとまべく女の風俗ふ係りうる事をゝくさぐ記せり

和漢印章考 五巻

同編

本朝古印の摸本を圖し其制度の用格を弁ぜ其考漢印ふ渉る或以て和漢と目もすべく朱象賢が印典の作格ふ倣ひて記り

食物沿革考

同編

昔の食物と今の食物と變格在る事を弁じ食器の古圖をのせ考を記せり

芭蕉翁年譜

一名おせ或年代記
翁一代の始終を記せり

同編

高尾考

妓女高尾十一代の傳を記し遺器遺墨をうつしのせり

同編

茶湯初心抄

茶道を学ぶる人此書をゝまべ茶席ふつゝりても恥をとゝぐる

同編

俳諧早引草

著作堂主人著

四季の詞ハさゝりもべく俳諧ふ用ひきものハもゝさゝ註釋し見るふ見やすく引ふ速うるを宗とゝ席上の重宝

6500

申一朔著作堂主人著

玄同放言

第一集三冊
第二集三冊
第三集三冊
第四集三冊

出來

天地之部植物之部人事之部亦人事之下より器用之部ゆ至るこの篇ハをさ〳〵珍説奇談を雑識し且縮字を多く載せ〳〵閲するものゆゑ〳〵ちむゆゑを上集ゆ比べバ俗の耳ちらかるも多くり器用之部より動物之部ゆ至る古器異獸奇鳥等の圖説多く此集中ゆ有異聞珍説多〳〵閲するものまれ〳〵隹境ゆ入らん就中佛法僧鳥の寫生六古人の摹本を多くあつめて異同あるを著せ此他北越の雪むし異魚海獸の画畫をべて寫生を旨とせゆ罕なる物種々載せり

近刻

此集全部十二巻ゆ至りて始めて全くべ〳〵遠くらべ全書とゆんえの形り

近刻

天保七丙申年九月發兌

大坂心齋橋筋博勞町 河内屋茂兵衛

江戸小傳馬町三丁目東側 丁子屋平兵衛壽梓